

## 春寂寥

公益財団法人大阪狭山市文化振興事業団  
理事長 指吸明彦

我が家の前に桜並木がある。引越して三十年近くになるが、仕事にかまけて桜をゆっくり見ることもなかったし、散った花びらの後始末がむしる煩いと思うだけで、とても花見気分になれなかった。

昨年桜花の盛りも過ぎしある日、桜並木の背景の霞がかかった丘陵を見るとはなしに見ていると、目の前の桜の枝から花びらが一枚ゆつくりと静かに舞い落ちて行った。その時、まわりの時間がすべて止まり、その一ひらだけが時を得たかのごとく、地上に落ちるまで舞うかのように長い時間をかけて散り落ちた。

あ、そくだ！これはあの時の歌の風景ではないか。急に頭の中で時間が遡り始めた。まわりのすべてが四十五年前に戻った。

学生時代だ。その時よく歌った旧制松本高等学校寮歌「春寂寥」の一節、♪「傷める心今日是我 小さき胸と懐きつつ、木の花蔭にさすらえば あはれ悲し逝く春の 一片毎に落る涙」♪を思い出した。桜の花の散ること涙が「つぶつぶこぼれゆく。若き日の感傷編である。長い間歌うことを忘れていた寮歌の世界が甦った。

私にとって寮歌は青春時代そのものであった。私と寮歌との出会いは、大学受験のラジオに流れていた北海道大学予科の「都を弥生」だった。そして黒澤明監督のリバイバル映画

『わが青春に悔なし』で京都の第三高等学校の学生達が吉田山で歌った「紅萌ゆる」である。これが若き私の心を虜にってしまった。早速レコード店で寮歌全集を買い求め、疎覚えながら浴槽で大きな声を出して歌った。寮歌は基本的には七五調の歌詞で二拍子のリズムが多いのだが、中には素晴らしいメロディーもあり、歌っている内に心の底からエネルギーが湧いてきた。先輩から寮歌を歌う時は、歌詞を明瞭に腹の底から声を出し、全身全霊で歌うべしと教えられた。

寮歌は内容である。例えば「玲瓏」という語などは現代あまり使われないが、むしろこの語の響きこそ魅力を感じる。寮歌の魅力の一つは「言の葉」であると言われる。寮歌には学生の世相に立ち向かう使命感や情熱、先輩と後輩の絆、友との別離、自然や四季等が巧みに歌い込まれている。旧制高等学校は昭和二十五年にその歴史を閉じ、私は当時の寮生活を体験していないが、よく歌った寮歌は、東京の「第一高等学校」から名古屋の「第八高等学校」までのナンパー校、水戸高等学校の「雲白く」、富山高等学校「丘の團欒に」、大阪高等学校「嗚呼黎明は近づけり」、旅順高等学校「北帰行」などである。孤独が癒され、心が落ち着き、澄んだ力が漲って来る、まさに浩然の気を養うが如き妙薬である。

人は誰でも人生の伴侶として音楽を理解し、その魅力をいつの時も感じるだろう。久しぶりに寮歌の世界に戻った私、さて、美酒を愛でつつ、我が家の浴槽で大いに放歌高吟いたそうか……今年の桜木の満開を期待して。